

「氣」の思想と「間」の文化

——東洋と西洋との差異——

高須裕三

(一) 有形と無形との二層構造

すべての哲学ないし思想体系は、「本質界」(無形の場)と「現象」(有形の物)との相互関連の仕組みについての論究である。

ちなみにヘーゲルによれば、

「事物は根拠の中から出現する。……根拠は条件(制約)との合一によって外面的直接性と有の契機とを獲得する。……このような、根拠と条件とによって媒介され、しかも媒介の止揚⁽¹⁾によって自己自身と同一的になった直接性は、即ち実存である。」

他方、曹洞宗の開祖、道元はヘーゲルに先立つこと約六百年の昔、右の論理に符節を合するような趣旨をつぎのような寓話で説明している。

「麻浴山宝徹禪師、あぶぎをつかふ、ちなみに、僧きたりてとふ、『風性常住、無処不周なり、なにをもてかさらに和尚あぶぎをつかふ』
師いはく、『なんぢただ風性常住をしれりとも、いまだ、ところとしていたらざといふことなき道理を知らず』と。
僧いはく、『いかならむかこれ無処不周底の道理』
ときに師、あぶぎをつかふのみなり。
僧、礼拝す。

仏法の証驗、正伝の活路、それかくのごとし。常住なればあぶぎをつかふべからず、つかはぬおりも風をきくべきといふは、常住をもしらず、風性をもしらぬなり。風性は常住なるがゆへに、仏家の風は大地の黄金なるを現成せしめ、長河の蘇酪を参熟せり。」⁽²⁾

右の説話の中で、若僧は、風性すなわち空氣について、空氣は（時間的に）つねにあり、（空間的に）処としていたらざるなき性質であるゆえに扇の使用は不要だ、と禪問答の挑戦をしたのであった。

禪師は無言で扇を動かし、この道理が解らぬかと言いたげな顔つきであった。

若僧は悟ったのであろう。恐れ入りましたと礼拝した。

その際、若僧が悟ったのは、本質が現象に具現化されるには、媒介としての人間の行為（右の場合、扇を手で動かすこと）の必要性についてである。

ヘーゲルのさきの引用の中で、「しかも媒介の止揚によって」とあるその止揚がなされるためには、人間の動きが必要なのである。仏家の生活慣行たる作務（勤勞）によってこそ、大地（根拠）から黄金色に稲が稔る（現象）のであり、また揚子江沿岸名産のチーズが美味に出来るのである。

(二) 「氣」のつく語の深い意味

ところで漢字の語彙は、右のような現象界と本質界との弁証法的構造を示唆する仕組みになっていることが少なくない。

右の寓話の題材とされた「空氣」について考えるに「空」はこの場合は現象界の相であり、「氣」は本質界で特定現象を生み出す可能態である。それゆえ「空・氣」であり、この「・」は相

互媒介の機能を示している。

そこで学問的概念としての語彙に、しばしば「氣」の字のつくことは偶然ではないのである。

たとえば大学の理学部では、この「空氣」のほかに「氣象」が研究分野の有力なものであるが、象はもとより現象の意味であり、氣は「天候や四時の変化を起すものになるもの」である。

医学部では当然のことながら「病氣」を研究の主題とする。病は病的現象であり、氣はその背後の生命の場である。俗説に「病は氣から」と言い、その氣をば心の持ちよういかんと解する人が少なくないが、この氣はもっと深い次元、自然的生命力の世界と解すべきであろう。

工学部では「電気」という春秋に富む分野が開けている。電は放電現象などの目に見える事物であるが、氣は無形のエネルギーの場であろう。ニュートンの古典物理学に対しファラデーを先駆とする現代物理学が「電場」という概念を用いた（一八三七年）が、日本での「電気」には、もともと目には見えぬが根底的な「場」の意味合いが加味されていたのである。

さて経済学関係では、いま日本をも含めて先進諸国共通の悩みは、いかにして「景氣」を奮い起すかである。

およそ経済学は近代に入ってから科学として形成されたので、数量統計によって客觀的事実を土台として作り上げる性格が濃厚である。しかるに企業家が遠近の差はあれ、将来の損得を予想し

て投資するという分野が物をいう「景気」は、経済学としては扱
い難い部門なのであるが、経済の現実には、いまこもやもやした
部分の多い「景気」に活力が出なくて難儀しているのである。景
気はもとより現象的景色、気は「なんとなく感じられる無形の勢」⁽⁴⁾
である。

法学部では「法律」が研究対象であるが、これも「法・律」の
意味である。法は正義 (Right) の意味で、時と所とを問わず妥
当する自然法である。たとえば「人を殺してはならぬ」というよ
うな至上命令である。それに対し、律は、支配者によって民衆の
前に置かれた (Gesetz) という意味での人為法 (Gesetz) で、時
と所とを限定して妥当するものである。たとえば道路交通法、食
糧管理法のようなものである。法は律によって裏打ちされてはじ
めて正義への方角で実効をもち、律は法を映してこそ守られるに
値するものとなるのである。法という語には氣の字はないが、自
然法であるゆえに、自然の線で氣に相通することとなる。

つぎに芸術学部では、絵画・演劇などの重要な研究対象として
「色気」がある。この場合も、色は現象界の事、気は本質界の生
命力である。岡倉天心や横山大観が弟子たちへの訓練として選ん
だ課題の一つに「空気を画いて来い」というのがあった由で、大
観自伝の中で、日本画の中心概念は「氣韻生動」だと述べられて
いる。

このようにして種々の学問自体が、その本質をなす「氣」の文

化」の一現象形態なのである。「氣の文化」というと、人は世俗
に「氣学」と稱する占いを想起して、何か迷信くさいと感じて
喰わず嫌いの態度を示すかもしれない。

しかし昔、漠然と「氣」と称された分野の中で、たとえば病氣
にしても、電氣にしても、つぎつぎに科学的に解明された部分が
拡充されてきたのが学問の進歩の歴史であり、科学が進めば進む
ほど「氣」の文化的認識の必要性が増大してくるのである。それ
は本質に還ることを忘れて現象界を追いかける科学は、暴走車
のように人類を破滅の淵に運びかねないからである。

(三) 東洋思想の精髓

「氣」の原型たる「气」の字は、小にしては個人の吐息、大
にしては雲氣の動きを示している。氣の形は、氣流の上昇・棚引
き・下降の三種の流れを示している。それは生命のリズムでもあ
り、また自然の時の運行でもある。朝―昼―夕―夜―朝と繰返す
波状進行が螺旋状に展開していく型は、この世の上昇―維持
―下降の動きの原型である。それはまた歴史の命運でもある。平
家物語の冒頭を飾る「諸行無常、盛者必衰」の名句は、歴史
法則といつてよく、何者もその例外ではありえない。

それならば「必衰」という滅びの後にはどうなるか。その際、
滅びに二種あって、無常を悟り泰然として氣のリズムに則して滅
びていく場合には、ドイツ語の zugrundegehen (=滅びる) が

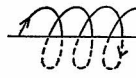
現象 本質

陽 陰

盛 衰

有形 無形

昼 夜



永く生きるのである。

それに反し、平清盛のようにあくまで現象界に執着して断末魔のごとく、氣のリズムから逸脱して死ぬ場合は、本質界に赴けず、成仏できず、野垂死となる。それゆえ、涅槃経の偈文は、「諸行無常、是れ生滅の法、生滅滅し已らば、寂滅楽と爲る」と教えるのである。(寂滅の境地を樂しと自覚する心構えに導くことは、高齢化社会における老人教育の要諦である。真の福祉社会においては、氣の文化としての宗教が復活されなければならない。)

さて「氣」の上昇・棚引き・下降の動きでこの世を理解する思考方法は、東洋思想の中樞をなしてきたものであり、とくに戦前の世代にとっては縁の深いものであった。小学校の講堂で戦前よく見受けられた「忠」・「孝」の額の筆者、文天祥の「正気歌」に

含意するように Grund (根拠、本質界) に赴くわけで、その際には自然のリズムに則して「輪廻、転生」として後継者にバトンタッチされる。(平家物語、平重盛の例) ひとたび死んだ肉体は、それ自体が蘇生することはないが、

重盛の遺志は、平家一門の若武者たちによって滅びの美学にまで高められていく。

また観阿弥・世阿弥六百年の能楽の歴史に見られるように、代々の後継者によって螺旋状に展開して引継がれていくのであり、その文化は

「天地 正氣有り、雜然として 流形に賦す。下れば即ち 河嶽と爲り、上れば即ち 日星と爲る。……」

すなわち本質界の氣が現象界の万物を作り出したのであって、氣が下降して地上に山川が出来、氣が上昇して太陽や星となったという宇宙哲学である。

この文天祥の詩に共鳴して、幕末の藤田東湖は「天地正大の氣 粹然として神州に鍾る。秀でては不二の嶽と爲り……発しては万 朶の桜と爲り……」と唱和した。

(四) 西洋の氣の思想——場の物理学——

このほか「陰陽五行」説が陰陽二元の世界の循環原理を説いて中国の長い伝統文化となったことなども含めて、東洋の氣の思想がいささか詩的空想に流れる憾みがあったのに対し、西洋のエーテル説は、古代より自然科学の面に即しつつ同じく氣の思想の半面を形成して現代の物理学に到達してきている。

古代ギリシャ哲学では物質元素として地上には土・水・火・空氣を、天界には第五の元素として「エーテル」を想定した。そしてルネッサンス末期までは大氣の外側の宇宙空間に充満するものとしてエーテルの存在が考えられていた。近代に入って光学の創始につれ、光の媒質としてのエーテルが唱えられ、一八七三年にはマクスウェルの電磁気理論の定式化によって電磁波の担い手としての新しいエーテル像が作られた。しかし一九〇五年、アイ

ンシュタインの特殊相対性理論によって光媒質としてのエーテルの概念は放棄される運命となった。

けれどもその後の電磁場の量子論によってエーテルは電磁場という物理的性質をもった空間の別称として蘇生されて今日に至っている。⁽⁶⁾

さらにアインシュタインはその後の論文によって「莫大なエネルギーが狭い空間領域に集中してあるものが物質粒子であること、物質が稀薄に拡がっているのがエネルギーであることを示した。したがって『場』とは媒質によって荷われるものではなく、物質から独立して存在するエネルギーの空間分布であり、また『場』と『物質』とは二元論的に考える必要はなく、エネルギーという見地から一元論的に見られることが明かになった」という。

このようにして「気」に相当する英語としては *aether* ともいわれ、*energy* ともいわれ、*field* (場) と表現されることもあるのである。いずれにしても西洋では、東洋に比べて、現象界の物に即して展開される性格がはるかに強いのである。

(五) 「間」の生活文化——東西の差——

右のアインシュタイン論文によれば、エネルギーが狭い空間領域に集中したとき物質になる、という。すなわち根拠から現象が生ずる媒介となるものは狭い空間の装置である。これがわが国では古来、「間」と称されてきた。

たとえば神社の鳥居は狭い空間を作るためにある。これによって神のエネルギーが集中して、そこを通る人は神に呼応できる状態となるからである。また相撲道場や能楽堂の四本柱の装置も、あれによって狭い空間が作られ、気が凝結して、その場の力士や役者に力が与えられ神の世界と呼応可能になると思われたからである。

つぎに時間的な間の仕組みを考えよう。

野に出て農耕の重労働をしているとき、さあーっと時雨^{しぐれ}れてきたとする。農夫は大樹の蔭か濡れ縁にしぼし休んで雨脚の過ぎるのを待つ。その間、苦しい労働から解放される。すなわち時間的な間が入ったのであり、そこで俳句でも詠めば芸術の世界に赴ける。そこには本質界のヒューマニズムの救いがある。

あるいはまた収穫の祭として一日中、労働から解放される日もある。いずれも自然のリズムに呼応した間の設定である。そこで趣味や芸術や法悦の世界に遊び、心身をリフレッシュすることが出来るのである。

この間のとり方についても、日本人は雨とか収穫とか自然の契機に即応することが多いのに対し、西洋では古来、七日目を休日と定め、今でも午後五時には直ちに帰宅するというように人為的・数量的に間を定めて、物理的に生活リズムを編成することが多いのである。

以上に見てきたように、氣の思想や間のとり方についても東西

を比較すれば一応、対照的といえよう。(ただし東西の中間的性質をもつものとして北欧文化にも注目を要する。)

東西対照的の因由は何か。結局、東洋の農耕文化に対する西洋の牧畜文化の差異であろう。農耕は太陽・土壌・気温等々漠然とした恵みの無形界を重視するが、牧畜は家畜の交尾が決定的に見えるので有形具象を重視する傾向になるからであろう。

(1) 『ヘーゲル大論理学』武市健人訳、岩波書店、中巻、一三五ページ。武市氏訳では「制約」とあるのを、私は「条件」という語を使わせていただく。

(2) 道元『正法眼蔵』「現成公案」の末尾。

(3) 藤堂明保『学研漢和大事典』七〇二ページ。

(4) 同右。

(5) 横山大観「大観自伝」講談社『学術文庫』一五〇ページ。

(6) 小川劭「エーテル」弘文堂『科学史技術史事典』一一六ページ。

(7) 遠藤真二「場の理論」弘文堂『科学史技術史事典』八二九ページ。

(たかす・ゆうぞう、経済・社会・文化史、日本大学教授)